

タイトル	寄書家から作家へ：内藤千代子の初期の著書を取りあげて
著者	仙波，千枝； SEMBA, Chie
引用	北海学園大学人文論集(50)： 116(23)-97(42)
発行日	2011-11-30

## 寄書家から作家へ

——内藤千代子の初期の著書を取りあげて

仙波千枝

### 序 章

内藤千代子(明治二六年二月九日～大正一四年三月二三日)は、明治四四年九月に博文館から刊行された『スキートホーム』を初め、『冷炎』(京橋堂 大正五年)・『毒蛇』(三徳社 大正八年)など九冊の著書を世に送った。初期に刊行された『スキートホーム』『ホネームーン』(明治四四年)・『エンゲージ』(大正元年、いづれも博文館)には寄書家として活躍していた『女学世界』に掲載された作品が収録されており、『女学世界』における内藤の人氣に支えられて刊行され、その魅力を改めて世に問うものであった。また『生ひ立ちの記』(牧民社 大正三年)・『毒蛇』も、『女学世界』の連載に加筆・修正して刊行されたものである。『エンゲージ』の執筆中、内藤は彼女を見出した河岡

潮風の死に遭うが(明治四五年七月二三日)、その後も『女学世界』への執筆を続ける中で博文館以外の出版社からも著書が刊行されるようになり、内藤は作家としての地位を築いていったのであった。

本稿では、内藤の著書のうち処女作である『スキートホーム』から『ホネームーン』『エンゲージ』までを取りあげ、各著書の執筆・刊行時における内藤の状況と読者の反応を明らかにしていく。この三作には、『女学世界』に掲載された作品が収録され博文館から刊行されたという共通点があり、内藤の初期の三部作として位置づけることができる。多くの女に読まれていた『女学世界』で活躍した内藤の足跡を追うことは、雑誌を読み時には投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、明治末から大正初期を生きた女の考え方を知る術になると考え

る。なお残りの著書については、後日別稿で検討することとする。

## 第一章 『スキートホーム』



写真① 『スキートホーム』

なり、大正二年九月までに二六版を数えた。<sup>(2)</sup> 特に刊行後四か月足らずで六版を重ねたことは特筆すべきであろう。<sup>(1)</sup> 装丁を杉浦非水、挿絵を竹久夢二が担当した。全三二四頁で一冊六五銭であった。<sup>(1)</sup>

内藤は、明治四四年春から東京の裁縫学校で学んでいた。内藤一七歳の時である。入学当初、内藤は「何しろ若い人たちが揃ひなんですから、それや花やかな賑やかな笑声の絶たことつて

『スキートホーム』

ム(写真①) 藤沢

市総合図書館所

蔵) 初版は、博文

館より明治四四年

九月五日に四〇〇

〇部発行されて一

三日で売り切れと

す。

(二四)

ありませんでしたわ」と青春を謳歌していた。小学校にすら通ったことがない内藤にとつて、裁縫学校はようやく手にした憧れの学校生活であったのである。内藤は大きな庇を張った流行の髪型に結び、海老茶袴を身にまとうこともあった。かつ「常々会長先生は一芸に達する者は万芸に達するとかつて御持論で、折々その引合に引張り出されて、思ひ設けぬ賞讃のお言葉を頂く」こともあり、執筆が忙しい時は宿題の提出を大目に見てもらえるなど特別扱いされてもいた。<sup>(4)</sup>

裁縫学校で共に学んだ友人は、後日『女学世界』に次のように投稿している。

猫背の丁子さん(筆者注\*内藤)は、何時でも唐人髷に結つて居た。ばらさんの金紗をかけて、よく銀の薄のかんざしをさして居た。藍がゝつた荒い格子の着物に赤い唐ちりの帯を猫背の背中にしよつてゐた。

(中略)

日曜日や祭日には、よく二人で遠足に出かけた。博物館の裏のベンチで、持つて行つた海苔巻を喰べたり、瀧の川で畑に残つた大根をぬいて、百姓に怒られたり、三河島で摘草をしたりした。

(中略)

Ｔ子さんは藤川先生といふ男の様な、さつぱりとした女の先生が大好きで、その先生の名前にちなんで、何でも彼でも、持物を藤色にしてしまった。<sup>(5)</sup>

しかしやがて内藤は、学友のみならず寄書家としての内藤に憧憬のまなざしを送る人々にまで、次のような感情を抱くようになったのであった。

美しいのや無邪気なのや品のいゝのや、絵のやうな友の数は多は持ちましても、誰一人真実の話相手になつて呉れるやうなのはなかつたのです。それもその筈、生れながらに家に財あり地位あり名望ある室咲きの花のやうな令嬢達と素寒びんの孤独の私と……。まるで別世界の住人なうでございますもの。<sup>(6)</sup>

憧れの学生生活や寄書家としての賞讃は、父親のいない地方の貧しい家庭出身で小学校にすら通つたことがないという内藤のコンプレックスを消すことができず、むしろ内藤に疎外感やさらなる劣等感をもたらした。そのため「エス」して日比谷図書館で読書する日が重なり、それがばれて父の従姉が経営する本郷区本郷森川町の下宿での人間関係もうまくいなくなつてしまつたのであつた。<sup>(7)</sup>

このような中で内藤は、夏休みを待たずして七月上旬に鶴沼

へ帰省し、『スキーートホーム』は鶴沼滞在中に刊行されたのである。秋になり東京へ戻つた内藤は、『スキーートホーム』のために思はぬ報酬も入つたりしたので、当分は私もおとなしく日毎くを針めどに親しんで居りました」という生活を送つていた。<sup>(8)</sup>

『スキーートホーム』の刊行について、内藤は『生ひ立ちの記』で次のように述べている。

その（筆者注\*明治四四年）九月初旬でございます。従来雑誌に掲載しました数種の短篇を取あつめ、巻頭の文をそのまゝ『スキーートホーム』と名づけて、さゝやかなお粗末な著書の出版いたされましたのは。

以前に某先生を介して一寸その事についてお話があつたのですけれど、私は例のボンヤリで他の原稿のことゝばかり思ひ違へてまして、何でもよろしいやうにと申上げてしまひ、そんなつもりは夢にもなかつたところへ、突然出版届に捺印せよと申越されて吃驚しました。（中略）それほど思ひがけなかつたので、やがて送り越された製本を見ますと、紙質もわるく口絵も可笑しく、あまりの見苦しさに興ざめて、むしろ腹立しくつてたまらなかつた。一冊の単行本にまとめるほどならば今些とどうかしたい望みもあつたし、仕様もあつたらうの……第一こんなもの買人がある

だらうかと疑った。

もつとも後日できゝますとね、みんなが危ぶんで種々の反対や冷嘲のあつたにもかゝらず、K先生が冒險的に引受けて世に出されたものなさうでした。ですからそんなことをかけるわけにはゆかなかつたんですつて。

内藤の意志は『スポーツホーム』には全く反映されておらず、内藤は仕上がりにも満足していなかった。「K先生」は河岡潮風、「某先生」は『女学世界』の編集者の一人であろう。河岡は明治四〇年に早稲田大学を卒業後博文館に入館し、『実業少年』、『冒険世界』などの記者として活躍する傍ら、『女学世界』にも学校訪問の記事などを執筆し読者の人気を得ていた。

河岡は内藤の人気の理由について、「千代子の文は思想と用語とを以て誇うべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、繩墨に律せられざる点に存するのみ彼の女が一日も校舎に学ばざる事と、美作文法等の書を読まざりし事とは、以てその天真を失はざらしめし也」と述べている。明治四四年九月といえは、日本女子大  
 学校で学んだ平塚明子や跡見高等女学校を卒業した物集和子らが『青鞥』を世に送らんとした時期であった。一方学校へ通つたことがない内藤の長所は「天真」のみである。しかし河岡は、『女学世界』で内藤が放つた魅力が著書においても発揮されるこ

(二六)

とを期待し、『青鞥』とは異なるタイプの作家を世に問わんとしたのであった。

内藤は明治四一年八月に『女学世界』に登場し(第八巻第一〇号)、同年一月一日に刊行された定期増刊号「心の日記」(第八巻第一五号)に応募した「田舎住の処女日記」が第三等を受賞して注目を集め、以後は二号に一回の割合で作品が掲載されるようになった。『スポーツホーム』には、明治四二年末から四四年前半にかけて掲載された作品が多く収録されている。

収録作品に、河岡が内藤をどのような作家として世に送らんとしたかをみる事ができる(表①)。「天女降臨」「説まつかぜ」「湖畔吟」は鶴沼の旅館で過ごす青年男女を描いた作品で、避暑地鶴沼を描く内藤を印象づける。明治三五年に江ノ島電鉄が藤沢まで開通し、鶴沼は避暑地として有名になりつつあった。なお「湖畔吟」に主人公嘉寿子の恋の相手として中山という青年が登場するが、『生ひ立ちの記』によると、中山は内藤の初恋の相手の名前であった<sup>1)</sup>。また「おてんば娘」「ハーモニカ」「少女の恋」には鶴沼で暮らす少女の生活が楽しげに描かれており、内藤の日常生活を想像させる。「ハーモニカ」と定期増刊号「嫁に行く人」(第九巻第一五号 明治四二年一月一日)に応募し第二等を得た「嫁がぬ人」は冒頭を一部削除して収録され、

表① 『スウィートホーム』収録作品一覧

題名	『女学世界』における題名	筆名	巻・号	発行年月日
スウィートホーム 歓楽之巻	スウィートホーム	無名氏	第10巻第5号	明治43年4月1日
晩餐会之巻	スウィートホーム	内藤千代子	第10巻第6号	明治43年5月1日
天女降臨	天女降臨	内藤千代子	第10巻第11号	明治43年9月1日
おてんば娘	おてんば娘	夢見る人	第10巻第8号	明治43年6月1日
ハーモニカ	ハーモニカ	内藤千代子	第10巻第9号	明治43年7月1日
少女の恋	熱烈なる少女の恋	内藤千代子	第9巻第16号	明治42年12月1日
まつかぜ	小説まつかぜ	萩香	第9巻第10号	明治42年8月1日
嫁がぬ人	嫁がぬ人	内藤千代子	第9巻第15号	明治42年11月15日
夢より醒めた女	夢より醒めた女	内藤千代子	第11巻第2号	明治44年1月15日
湖畔吟	湖畔吟	萩香	第11巻第7号	明治44年5月1日
もゆるおもひ	思出多き函嶺の湖畔	内藤千代子	第10巻第2号	明治43年1月15日

\* 著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの

巻末には定期増刊号「マダム振り」(第一〇巻第二号 明治四三年一月一日)で第一等を獲得した「思出多き函嶺の湖畔」が「もゆるおもひ」と改題され収録された。なお巻頭に「スウィートホーム」を収録したが、『女学世界』でその続編と位置づけられる

「年の暮のマダム」(第一〇巻第一六号 明治四三年一月一日)・「新年のマダム」(第一一卷第一号 明治四四年一月一日)などは収録されておらず、書名を「スウィートホーム」としながら「ホーム」を描いた作品はこの一編のみである。「ホーム」は夫と妻が協力して営む理想的な家庭を表し、青年男女の憧れの一つであった。

ではなぜ、書名を『スウィートホーム』としたのであろうか。同書の広告は、「本書は東都各女学校学生間にスウィートホーム式なる新語を流行せしめし奇書也。男女青年の現代的傾向を最もよく描写せる小説以上の小説と謳っている<sup>(1)</sup>。「スウィートホーム式」とは、「ホーム」のような「男女青年」の憧れを描くことを意味する。『スウィートホーム』は、「ホーム」のみならず「男女青年」の憧れを代弁し、青年の閉塞感や「青鞥」とは異なる「男女青年の現代的傾向」を示して支持を得たのであった。

内藤の「スウィートホーム」は、赤門工科の学生で男爵の金子篤麿と結婚して鶴沼に母と下女きよと共に住む百合子を主人公とし、新婚生活や友人との交流を描いている。百合子は丸髻を結いかつては文学に熱中したが結婚後筆を折った女で、夫は百合子の家の婿養子という設定である。なお金子百合子という名前は、内藤が二度『女学世界』で筆名として用いたことがあつ

たため、内藤がモデルだと思った『女学世界』の読者が少なからずいたようである。

内藤は『スキートホーム』を以て、青年男女の憧れの描き手として世に送られた。しかし当時、内藤は『女学世界』で自らを「夢より醒めた女」とよび、また上京後は「確固たる信念もなく、めざすべき標的もなく、私の心はさまざまに矛盾してゐるばかり、毎日々々、こんな事しちや居られない」とあのように、裁縫学校になじめないのみならず寄書家としても行き詰まっていたのであった。一方悩める内藤に対し『女学世界』の読者は、「一回毎に御上達の貴女のお作、此頃はすっかり円熟してうれしうございます」という思いを抱いていた。<sup>(14)</sup>『女学世界』の読者は内藤の変化を既に察知し、「円熟」と好意的にとらえ見守っていたのである。そしてこの思いを綴った「夢より醒めた女」は『スキートホーム』にも収録されたため、『スキートホーム』の読者もまた「天真」だけではない内藤の世界を知ることとなったのであった。

それ故、『スキートホーム』の刊行について次のような意見が述べられたのである。

内藤さんのスウヰートホームが出てね、けれどあゝ云ふ事

をするにはまだ早すぎはしないでせうか

(中略)

新らしいお作は一つもないやうですね

(中略)

あんなに文が月並になつて了つてはねえ……私も初めは夢中になつてよみましたけれど年中同じ事ばかり<sup>(15)</sup>

転機を迎え成長を予感させる内藤の過去の作品を集めて世に出すことは、内藤の成長を阻害しかねないとの危惧がうかがえる。『女学世界』の読者は、青年男女を華やかに描いた内藤が、次にいかなる世界を築くかにこそ期待していたのであった。なお「まだ早すぎはしないでせうか」との言は、内藤への期待を表すものに他ならない。

『女学世界』の購読者以外にとつて『スキートホーム』は新鮮であつたが、内藤の成長を求める『女学世界』の読者の目は、内藤の新たな世界に向けられていた。このような中で『スキートホーム』は、『女学世界』で名を成した地方在住の一少女が、転機を迎え新たな世界を拓くことへの期待を持って読まれたのである。

第二章 『ホネームーン』



写真② 『ホネームーン』

『ホネームーン』

(写真②) 藤沢市

総合図書館所蔵)

は明治四四年一二

月二九日に博文館

より刊行され、大

正二年九月までに

一二版を世に送った。<sup>(16)</sup> 全一五編のうち八編が書き下ろしで（表  
 ②）、『スキートホーム』同様杉浦非水が装丁を担当した。<sup>(17)</sup> 全三  
 三八頁で一冊六五銭である。<sup>(18)</sup> 内藤は、同書の執筆依頼について  
 次のように述べている。

ある夕刻、思ひがけないK先生からお電話なんです。出  
 版物の事につき是非御面談致したい件があるからこれから  
 伺つてもいゝか、つて。

(中略)

私はまたまた長い間の疑問であつた人に親しく遇つてお話し  
 たつてことがうれしくて、早速お友達中へ御吹聴の手紙書  
 いたほどでした。

表② 『ホネームーン』収録作品一覧

題名	『女学世界』に おける題名	筆名	巻・号	発行年月日
ホネームーン				
紅筆	懂がるゝ少女の手紙	内藤千代子	第9巻第7号	明治42年5月15日
若き日の戯れ	滑稽 小説 塩加減	萩香	第9巻第9号	明治42年7月1日
華族系	華族系	内藤千代子	第11巻第12号	明治44年9月15日
逝く春の乙女				
学生の都会				
花つみのする夏の夢		内藤千代子	*	
ゼラニウム				
コスモスの頃				
華厳行				
鶴沼日記 上 かるたのまとり	田舎住の処女日記	内藤千代子	第8巻第15号	明治41年11月15日
中秋高し	霜月日記	千代子	第8巻第16号	明治41年12月1日
下 初春三日	お正月日記	千代子	第9巻第2号	明治42年1月15日
虚栄の都へ				
帝劇の楽屋				

\* 『女子文壇』第7巻第11号（明治44年9月1日）に掲載

\*\* 著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの



(中略)

その時の御用件といふのは、スカートホームの売行が案外にいゝについて、姉妹篇の『ホネームーン』とでも題したものを出版ではどうか、そして巻頭に表題の如き長篇が欲しいのだから、それを書いては貰へまいかとの事なので、苦もなくお引受致しました<sup>(19)</sup>

河岡潮風の訪問は、秋に内藤が東京の下宿へ戻って間もない頃であつた。<sup>(19)</sup>『ホネームーン』には『女学世界』に初期に掲載された作品が多く収録され、『スカートホーム』で内藤の魅力に自信を得た河岡と博文館が改めて内藤を世に送らんとしたことが分かる。

巻頭に収録された書き下ろし「ホネームーン」は、五高出身の法学士神山和雄とその妻艶子が塩原へ新婚旅行に出かけるという内容である。内藤は、塩原を作品の舞台に選んだ理由を次のように述べている。

私はホネームーンの舞台を何処にしやうか、といろ／＼考へました。(中略)丁度紅楓のころなり、塩原あたりへ実地調査に出かけてみやうかと、親友の小枝さんに相談いたしました。

(中略)

(110)

おゝ塩原！ 塩原！ 塩原!! 何といふ美しい仙境の秋色であつたでせう。茫々たる那須野ヶ原を貫く一帯の坦途、三里あまりを車上にゆられ／＼て山深く入るまゝに、あの溪流の音、岩石の配置、血の垂れさうな紅楓の輝き、私はもう恍然としてすべてを忘れて了ひました<sup>(20)</sup>

河岡は明治四四年六月に博文館から『野那須温泉之葉』を刊行しており、「ホネームーン」の舞台に塩原を選んだ背景には河岡の影響があつたことが考えられる。内藤は裁縫学校の遠足や文展・運動会の見学などに多忙でなかなか執筆に着手できなかったが、ようやく「親友の小枝さん」と取材旅行に出かけたのであつた。内藤らは塩原の宿に二泊して周辺を取材し、「ホネームーン」作中に和泉屋別館・天狗岩・紅葉ヶ丘などを登場させた。

「ホネームーン」の艶子は、夫の友人が来訪し食事する際には同席するなど、夫と対等の関係を築く妻として描かれている。一方艶子は結婚について、「私は、ちつとも自分の意思でかうなつた(筆者注\*結婚した)んぢやないのだから。たとへばもし和様(筆者注\*夫)にいけない事でもあつたなら、母様や藤岡の叔母様(筆者注\*仲人)の苦情をもちこんでいゝわけなのだわ」と冷めた考えを持ち、夫に対しても「いくら自分の氣に

入った人とでも、欠点のない方とでも、いざこれが自分の未来を俱にする人ときまつては……云ひ知らぬ寂しさに涙も流れました」と述べている。<sup>(22)</sup> また折に触れて独身時代の男性の友人を回顧する。内藤は二作目で「ホーム」を書き下ろし『スキートホーム』の作者として読者の期待に応えたが、そこで描かれたのは甘く楽しい結婚生活だけでなく、結婚に対する女の本音であったのである。

塩原への取材旅行の翌日、内藤は執筆のため鶴沼へ帰省したが、「気がゆるんで仕舞つて、些ともはかゞ行きません」という状態<sup>(23)</sup>で、ついに原稿を催促するため河岡が自宅を訪れることとなった。その三日後に内藤と河岡は帝劇で文芸協会の「人形の家」を観劇し、それについて綴った「帝劇の楽屋」は『ホネームーン』に収録された。「生ひ立ちの記」によると、「帝劇の楽屋」は雑誌に投稿するつもりで書きかけたが急遽『ホネームーン』に収録することとなり、「酒場<sup>バ</sup>の卓上で書きなぐり」仕上げたものであった。<sup>(24)</sup>

そして観劇の翌晩、内藤は河岡の自宅で深夜一時過ぎまでかかり『ホネームーン』に収録する作品を執筆したのである。内藤は『生ひ立ちの記』に、河岡の母に汁粉やすしなどを振る舞われ恐縮したこと、河岡が母親思いの息子であることを垣間見

たことなどを綴っている。この時内藤は墨を摺って筆で原稿を書き、河岡は傍らで内藤を励ましながら辞書を引いたり脱字を直したりした。<sup>(25)</sup>

初期の作品が多く収録されている『ホネームーン』において、書き下ろし作品は内藤の近況を伝える役割を担っている。「逝く春の乙女」は東京での学生生活を描いた作品で、野球の試合やポートルースに関心を持ち友人と語り合う天真爛漫な様子が描かれている。また内藤は「虚栄の都へ」で、『女学世界』の寄書家として活躍していた上原綾子（花散里）との再会を記した。

内藤と上原が初めて会ったのは明治四三年の春で、上原が鶴沼の内藤の自宅を訪れ、その様子を上原は「鶴沼の半日」に描いた（『女学世界』第一〇巻第九号 明治四三年七月一日・第一〇号 同年八月一日）。上原は裕福な令嬢の日常生活を描く内藤とは異なるタイプの寄書家であったが、内藤は上原を姉のように慕っていた。なお内藤は後に、上原の遺稿集『ひなげしの花』<sup>(26)</sup>（文陣閣出版部 大正三年）に序文を寄せている。内藤と上原という『女学世界』人気の寄書家が登場する「虚栄の都へ」は、『女学世界』読者の関心と呼んだであろう。

「ゼラニウム」「コスモスの頃」や『滑稽塩加減』を改題した「若き日の戯れ」、「花つみのする夏の夢」も内藤の日常を想像させ

る作品である。また巻末に収録された「鶴沼日記」は『女学世界』に掲載された三編の作品で構成されており、年始の挨拶のため裁縫塾の師匠の自宅を訪れ、藤沢の町で買物をする少女の暮らしが描かれている。ここで内藤は、「まあ一同の品性の下劣な事、嗜好の野卑な事。こんな人達とは口を利くのさへ恥のやうに思はれる。(中略)まだ真の友の味と云ふもの知らぬ私と、同く文学の花の香に酔ふて居る方を、かぎりなく慕はしく、しばし魂は体を飛んだ」と裁縫塾の同輩と距離を置き、「文学」(投稿)に熱中する仲間を求める思いを綴った。なお「田舎住の処女日記」は冒頭部分が削除されている。一方「華族系」では、「避暑避暑にはずる分都人士も入り込む土地故、すねて立ちたる女郎花、金にまかせて我が手活の花とこゝろみた人達も一人や二人ではありませんでしたが、お葉さんはそんな時、いつも口惜しがつて泣きました」と避暑地鶴沼の女の気持ちを描いた。<sup>28)</sup>これらの作品は、『スキーートホーム』に引き続き、鶴沼に住む内藤を印象づける。

また「紅筆」は、『女学世界』に掲載された「憧がる少女の手紙」に加筆し改題したものである。男性の友人宛の書簡を集めた同作品は、『女学世界』掲載当初同誌の担当者をして「これは容易ならぬ風教問題である」と言わしめ、<sup>29)</sup>読者も「いやな小

娘です」という反応を示した。<sup>30)</sup>しかし『女学世界』の担当者が「其の文章は実に独創で何人にも真似のならぬ妙所がある読んで見るとくだらない様であつて其実中々うまい事をいふてゐるその清新の気人に迫るといふべき」と述べたように、内藤の魅力が発揮されていたのであつた。

『ホネームーン』の刊行について、『女学世界』の読者は次のような感想を寄せている。

内藤様のホネームーンが出ましたのね、大変な評判なので、早速拝見いたしました。私失礼ながらあんまり感心致しませんでしたわ、読んでしまつてから頭の中に少しの感じがありませんの、薄ぺらな、奥行のない様に存じましてね、あら／＼私としたことが、とんでもないわる口ばかり申しましたわ、それでも内藤様崇拜者の一員なので御座います。<sup>31)</sup>

『ホネームーン』は版を重ねたが、『女学世界』の「内藤様崇拜者」は既に食傷気味であつた。書き下ろし作品も新しいイメージを与えるものではない。内藤が描く華やかな世界は、青年男女の憧れを一時的に満たすものでしかなかったのであつた。

内藤は、『ホネームーン』脱稿後の思いを次のように述べている。

心に足らぬ節のみなれど、兎に角書き上った原稿をすっかりお渡しして了つて、自分の責任だけのがれてみますと、味気ないやうなやるせない寂寥を感じまして、花やかな劇場の一夜の樂しかりしこと。懐かしいお部屋のさまざまな、日を経るまゝに思ひ出されてなりませぬ。何もかも忘れぬ生涯の思出の一つとなるでせう、とは先生へ差上げた文の端にも書きましたなれど、夢さら先生のお袖の蔭に保護される身とならうなんて……。出版済みにも成つて仕舞へば、自然御用もなく遠々しくなるであらうと、それを心細く思つたくらゐでした。

この時内藤にはまだ作家になる覚悟はなく、著書の刊行も思ひ出の一つでしかなかつた。河岡とも、編集者と著者という関係にすぎなかつたようである。

### 第三章 『エンゲージ』



写真③ 『エンゲージ』

『ホネムロ』  
脱稿後、河岡潮風  
は内藤を呼び出し  
次のように説いた。

貴女はもう行  
きつまりかけ

てゐる。と云ふのは如何にも眼界がせまいからだ。経験が浅いからだ。今の中早く方向を変へないと読者に飽かれます。

（中略）

勉強して修養して、立派な作家になる気はないか。切角これまでで売り込んだ名声を、みす／＼凋落させて了ふのも勿体ないわけではないか。併し今のまゝだつたら屹度さうなりますよ。すべてを僕に任せて呉れるわけにはゆきませんか。自覚なさい、自重なさい、あなたの天分を！

内藤の人氣に乗じて『スキートホーム』『ホネムロ』の刊行を成した河岡であったが、『女学世界』の読者が内藤に食傷氣味であつたように、河岡もまた内藤に変化が必要であると感じ

ていたのである。河岡は、内藤に対し次のような思いを抱いていた。

筆に立つ者の基礎の薄弱なるは東西古今みな一なり。松露と空つ風名物の鶴沼より、日本の若き女達の思想の一部を作りたる千代子は、今後いかなる路を行くべきか。時代は絶えず進歩す。世人は同一模型の文章には倦く。かてゝ加へて、千代子は多年志望せし憧憬せしものゝ内或一部を満し得たり満足は進歩の敵。<sup>(10)</sup>

河岡が最も恐れたのは内藤の慢心であったが、これは河岡の杞憂であった。しかし、小学校すら卒業していない内藤が「筆に立つ者の基礎」を確固たるものにし作家としての個性を築くことは不可避かつ緊急の課題であった。まして『青鞥』が刊行され筆持つ女が注目されている時である。河岡は、地方出身で学歴のない内藤が青年男女を魅了したことを以て内藤を「謎の女」とよび賞讃したが、これだけでは長く支持され得ないと考えていたのであった。

「新しい光明を見出したいと悶へ悶へてゐるのです、が、みちびいてくれるものもなく、服すべき偉大な力もなく、行くに道なく、かへるべき家も知らず、たゞなやみつかれました」との思いを抱いていた内藤は、「すべてを僕に任せて呉れるわけには

ゆきませんか」という河岡の言葉に、「私、これほど心の琴線に触れた、優しい頼もしい言葉をきいたことはないんです」と感激<sup>(35)</sup>、河岡の指導の下作家修業をする決意をした。また内藤はこれ以後、河岡から毎月二〇円の補助を受けることとなった。<sup>(36)</sup> なお河岡は内藤にこの話をする前に内藤の母に話してその意向を探っており、内藤の母は娘が作家になることに賛成したようである。

『エンゲージ』（写真③ 藤沢市総合図書館所蔵）の巻末に収録されている「名残りの旅」は、孝（大学を卒業して法学士となり文官試験にも合格）と政子（第三高女の卒業生）という実の兄妹が、伊豆へ「二人が新生涯に入る記念に茶目旅行」に出かけるという内容で、明治四四年の暮れに河岡と行った旅行を基に書いたものである。この旅行の趣旨は次のようであった。

この旅行中の出来事を骨子として、一篇のローマンスを作り上げやうといふのです。嫁がんとする名家の令嬢、兄君なる法学士にすゝめられて、処女時代に名残りを告ぐべく旅程に上る。折しも年末年始、舞台は豆相の温泉場、ついで、しまひにや自ら仮定の人物になりすまして了ひ、いゝ気になつてふざけたんです<sup>(36)</sup>

孝は旅行前に、「処女の時代はもう長へに来ない。して見れば、

今の中に出来るだけその時代を楽しんでおく必要があるではないか」とその旅の意義について語った。<sup>(40)</sup> また孝は、卒業後の就職難や生活難を厭い自ら落第する大学生の「学生時代享楽主義」にも言及している。学生時代や「処女の時代」に名残を惜しむという行為は、高等遊民や結婚を忌避する女が話題になっていた中で、青年の関心と呼ぶものであったと言えよう。

内藤と河岡は、明治四四年一月二十九日から翌年一月二日まで、修善寺にある菊屋別館の「表二階」とよばれる日当たりのよい部屋に滞在した。「表二階」は同年に夏目漱石が滞在した部屋と同じ棟にあり、桂川の水音がよく聞こえ嵐山が望める。内藤は『生ひ立ちの記』に、宿の者に「奥様」とよばれ、給仕が来ないので河岡と差し向かいになる食事が決まり悪かったと記している。

菊屋別館の食事は洋食か和食かが選べるようになっており、内藤らは朝食に洋食を選択した。また伊東から運ばれてくる鯛を好んで食べたようである。滞在中河岡は菊屋別館独特の長い廊下を伝って日に何度も温泉に足を運び、内藤はその送り迎えをさせられることもあった。菊屋の温泉は大浴場ではなく桂川沿いに小さい風呂場が並んでおり、いっぱいに入れない時もあった。滞在中、二人はほとんど外出しなかったようである。

内藤と河岡は、一月二日に修善寺を発って天城山を越えて下田に出、天城丸で熱海へ向かう予定であったが伊東で一時下船した際に乗り遅れ、小船で熱海へ向かった。熱海では河岡がかって病氣療養中に滞在した青木館に宿を取り、梅林などを見物して一月五日に内藤は鶴沼へ、河岡は東京へ戻った。<sup>(41)</sup>

内藤は旅行後の様子を、『生ひ立ちの記』に次のように記した。先生は声をひそめて、ねえ君、帰京てみたら大変なことになるて了つてた、君と僕との評判は。つて先輩からの忠告状めいた手紙などもお見せになりました。それは正しく私も知つてる某先生の御手蹟でした。

けれどもそれは覚悟の前ちやありませんの。私冤罪ならば何と言はれたつてかまひませんわ。「芸術のための犠牲」ですもの、仕方がないわ、ときつぱり申す

（中略）

何処から洩れたものですか、私のお友達……殊に文壇の方面には縁の遠い筈の、お裁縫の生徒たちの耳にまで入つたものとみえまして、みんなからいろんな手紙が舞ひ込みました。

（中略）

それが決していやではなかった。むしろ内心うれしくも痛

快でもあったのです。<sup>(43)</sup>

二冊の著書が好評を博した内藤と人気記者河岡潮風の関係に関心が持たれたのは当然であろう。内藤は「文壇の方面には縁の遠い」友人の反発をも買ったことにより、河岡の下で作家の修行を積むことに周囲の理解が得られないと知り、河岡と「一日一信」という取り決めを交わしてさらに密な関係を築かんとした。<sup>(44)</sup>そして内藤が『生ひ立ちの記』で「先生は大概土曜日毎にやつていらした」と述べ、河岡も『五々の春』(博文館 明治四五年)に「鶴沼行はいつも土曜」と記したように、作家と編集者以上の関係となったのである。

しかし、内藤と河岡の蜜月はここまでであった。「興が向かなく筆はもてない」という内藤に対し河岡は「必要もないのに濫作や駄作をお強ひなさる」ため、作家としての方向性を見出す作業は容易ではなかったのである。伊豆旅行後の明治四五年前半、内藤はわずか二作しか残していない。従来は二号に一回の割合で『女学世界』に作品が掲載されていたことから、この時期の内藤と河岡の迷走ぶりがうかがえる。なお内藤は河岡との関係が円満ではなかった理由を、内藤が幾度となく河岡に「処女の矜持は捨られません」と主張したからだとしている。<sup>(45)</sup>

苦悶の中、内藤は明治四五年五月末に河岡の薦めもあり那須

(三六)

野へ旅立った。旅先で書いた書簡をまとめた「燃ゆる花燃ゆる心」には河岡宛のものも含まれているが、旅先の様子を無邪気に綴るのみで作家としてのあり方を議論する内容は含まれていない。また内藤は『生ひ立ちの記』に、河岡が自身の二五歳の誕生日の記念に内藤に贈った指輪をこの旅行中に紛失したと記している。<sup>(46)</sup>旅行後も二人の関係に改善はなかったが、この頃から河岡の病状が悪化したため、内藤と河岡が作家としての方向性について語り合うことは少なくなったのであった。

「処女の時代」への「名残り」は『エンゲージ』に収録された作品の多くに共通したテーマで、巻頭に収録された「はつ春」では「今年がお名残のお正月です。思ひきり遊ばうちやありませんか」と嫁ぎ行く姉に対して語り、「春宵記」では「姉さまのお雛様を、うちにおかざりするのも今年つきりなのねえ」と述べている。<sup>(47)</sup>書名である「エンゲージ」は結婚への第一歩を意味するが、内藤は「処女の時代」の終焉を意味する語として用い、青年男女を華やかに描く筆致はそのままだに「処女の時代」に「名残り」を惜しむ女を描いたのであった。

明治四四年九月に『青鞥』が創刊され、そこでは「新しい女」が結婚を忌避する主張を展開していたが、現実には結婚し妻・母として生涯を送るのが多くの女の生きる道であった。このよ

うな中で、「処女の時代」を謳歌しその「名残り」を記すことは、女が現実を受け入れる術となり得る。内藤はこのように、「新しい女」とは異なる方法で同性に問いかけたのであった。なお内藤は作品の中で「婦人問題」「婦人の覚醒」などに言及しているが、これらの表現に関する知識があることを示すにとどまっている。

「処女の時代」を謳歌したいという思いについて、内藤は初期の頃から作品で「身も意志も自由で色あり香あり蜜ある花やかな今、あだに過ぎて何うならう」と述べている。<sup>54</sup>内藤が上京し裁縫学校に入学したのも、「華やかな青春の日の思出もなく、糠味噌くさい世話女房になりすまして了ふなんて……とてもく堪えられなかつた」という思いからであった。<sup>55</sup>「処女の時代」を華やかに描きその「名残り」を記すことは、貧しい家庭で育ち「処女の時代」を謳歌できなかった自身の思いを満たさんとするものでもあったのである。

明治四五年七月一三日、河岡は『エンゲージ』の刊行を見ることなく脳膜炎で世を去った。内藤は臨終に立ち会い葬儀にも列席した。<sup>56</sup>河岡は小石川区（現文京区）の傳久寺に葬られ、河岡の母親は日蓮宗に帰依して日恵と称した。<sup>57</sup>

葬儀後『エンゲージ』の刊行について話し合いがなされ、次

のような結論を得た。

私の第三の著書、「エンゲージ」については、お気の早い御計画好きな先生、もう定価から頁数、表紙画や広告文の原稿まで見出されましたため、これは是非共完成させるやうにと、△△先生（筆者注\*坪井善四郎）も御力ぞへ下さいまして、取まとめられることになりました。

（中略）

親戚から補助されました分、月々二十円といふもの、それはこの一月（筆者注\*明治四五年一月）から先生がお立替下さいましたので、物質上で返せる御恩ぢやないけれども、けれども、「エンゲージ」の印税、御母堂へ八分、私へ四分といふ分配法は、△△先生方の御配慮でもあり、また私の故先生に対する、せめてもの心ゆかしであった。<sup>58</sup>

河岡が生前に準備をしていたことから、『エンゲージ』には河岡の遺志が反映されていると考えられる。『エンゲージ』に収録された一四編のうち、一一編が書き下ろしであった（表③）。河岡の母が同書の印税の一部を受け取ることとしたのは、内藤が明治四五年一月より河岡から月々二〇円の扶助を受けていたことに加え、河岡の母が内藤に対し良い感情を持っていなかったため、印税を分配することで河岡の母の気持ちを和らげようと



表③ 『エンゲージ』収録作品一覧

題名	『女学世界』における題名	筆名	巻・号	発行年月日
はつ春				
春宵記				
春たけなは				
五月ばれ				
青葉の蔭				
蝉時雨				
雲の峰				
月下の宴				
燃ゆる花燃ゆる心				
箱から出た女	箱から出た女	内藤千代子	第12巻第9号	明治45年6月15日
青葉の蔭	青葉の蔭	内藤千代子	第11巻第9号	明治44年7月1日
向陵の夜月	向陵の夜月	内藤千代子	第12巻第7号	明治45年5月1日
Love me little, but love me long.				
名残りの旅				

\* 著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの

したことが理由であろう。<sup>(59)</sup> なお河岡の母親は、博文館より遺族扶助料も受け取った。<sup>(57)</sup> また内藤は、形見として河岡愛用の万年筆、袱紗二枚、銘仙の綿入れを得た。<sup>(60)</sup>

河岡の死後鶴沼へ戻った内藤は、次のようであった。

恋人の跡を逐ふたなどと死恥はかきたくなかつたから――。その一念に引きずられて、一日／＼を過してきた。が、生きてゆくには母子三人、食べずにも居られない。もう貯金簿の高も知れてゐる――こゝに思ひ至ると、突然発作的に飛び起きて、机に向ふ事もありましたけれど、徒らにむら／＼と呼吸が切迫し、動悸が増進してくるばかりで、どうすることも出来なかつた。

(中略)

墨でもペンでも指輪でも野算でも、手にあたるほどの物はみな滅茶々に噛みつぶしてしまつた。私は眼を据て両手を握りしめたんです。唇から血を噴きながら、室中転がって歩いたんです。けれど、けれども、母の前では何気なく口から出まかせの串談など言つて、……花やかな笑ひ声に家内中の空気を震動させてゐた。偽善か孝心かは知りませんが、母に心配事なんぞさせますのは何より厭だつた。<sup>(61)</sup>

河岡がおらずとも作品は書けるという作家としての自尊心

と、家計を支えなければならぬという責任感が、河岡亡き後の内藤を支えた。この時期『女学世界』への作品掲載はないため、内藤は『エンゲージ』の執筆に専念していたと思われる。

鶴沼で『エンゲージ』を書き上げ、それを持って上京した内藤は、「まるで狂犬やまいぬのやうに、足にまかせて傍目もふらず歩きまはつて」から、かつて河岡が住んでいた家を見に行った。しかし河岡の母は既に転居し、家には見知らぬ人の表札がかけられていたのであった。<sup>(65)</sup>

大正元年二月一六日、『エンゲージ』は博文館より「謎の女(少女)」の著書として世に送られた（一冊七五銭 四四〇頁<sup>(66)</sup>）。「謎の女」とよばれた理由は、河岡が生前より内藤を「謎の女」が内藤を「謎の少女」と紹介したことにある。なお内藤はこの記事が縁で、『エンゲージ』刊行後の同年末から翌大正二年初めにかけて、大阪毎日新聞社の招待で大阪近辺を周遊し見聞記を同紙に連載した。この時内藤は、大阪近辺のみならず東京の文士や画家もよく訪れていた旗の酒場にも足を運び、五色の酒を口にした。<sup>(66)</sup>

『エンゲージ』の広告には、次のように書かれている。

著者は近く一年間に自ら悲喜哀楽幾多人生の波瀾を嘗め尽

して文も想も愈いよ鍊熟し終に此の編を為す（中略）巻中の毎編、女流より見たる人情の機微を穿ち一読血湧き再読肉躍らしむ。<sup>(67)</sup>

『エンゲージ』は、内藤が「悲喜哀楽幾多人生の波瀾」を経験したことにより「鍊熟」の度を増したことを示す作品として世に送られたのであった。また河岡の死後の執筆・刊行は、内藤の作家としての自立を示すものでもあった。

『女学世界』の読者は、『エンゲージ』を刊行した内藤に対して、次のように述べている。

「謎の女」と称せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非ずして、寧ろ空想と憧憬とを生命とする少作家也。其の作物に何等の印象なく、深刻なく、思想なきも、何となく軽快なるチャームを有す。（中略）近時少しく人生の殿堂を覗ひたるものゝ如く、其の声の漸く悲調を帯ぶるに至れり、「新しき女」の群に投じて、其の浦若き血潮を黒くする事なくんば可也。<sup>(67)</sup>

かつて「空想と憧憬」を描き読者を「何となく軽快」に「チャーム」した内藤は、「其の声の漸く悲調を帯」び女の痛みを描くようになって新たな世界を築いたことにより、その著書がようやく『女学世界』読者の評価を得たのであった。「処女の時代」

への「名残り」を記すことは、現実の生活の中で女に慰めと励ましを与え、共感をよんだのである。「現代式の女性」ではないと理解されていることは内藤に対する賞讃であり、「新しき女」と同じ道を歩まないことが望まれていることは内藤への敬意と期待を表すものに他ならない。そして本書により、内藤は作家への道を拓いたと言える。

『エンゲージ』は、大正二年九月までに九版を救えた。<sup>(3)</sup>

## 終章

『女学世界』に掲載された作品を収録した『スキートホーム』『ホネームーン』『エンゲージ』は『女学世界』における内藤の人氣に支えられ刊行された著書であるため、本来なら集大成として位置づけるべきである。しかし実際には内藤が転機を迎えて苦悶する様をふまえて読まれ、読者の目は内藤がその転機をいかに乗り越え新たな世界を築くかに注がれていた。そして「処女時代」の「名残り」を描くという処世術を提示したことにより、内藤の著書は評価を得たのである。

内藤の著書がこのような読まれ方をした理由は、内藤が『女学世界』の寄書家として読者と共に歩んできたからに他ならな

(四〇)

い。読者は内藤が描く華美な世界に魅了されながらも、最終的には内藤に地に足がついた世界を描くことを求めた。ここに、『女学世界』読者の内藤に対する親密な感情と、雑誌を購読し時には筆を執る女の真摯な生き方を見ることができるといえる。

そして上京後の挫折と河岡の死という逆境の中で己の世界を築き読者の期待に応え得たことが、内藤の魅力を増した。内藤千代子は、『青鞥』が話題をよんでいた時期に、「新しい女」とは異なる魅力を放つことにより作家への道を拓いたのである。

## 注

- (1) 『女学世界』第一卷第一号 明治四四年二月一日
- (2) 『女学世界』第一三卷第一二号 大正二年九月一日
- (3) 『女学世界』第一二卷第一二号 明治四四年九月一日
- (4) 内藤千代子『生ひ立ちの記』牧民社 大正三年 一五四〜一五八頁
- (5) 蘆間呉羽「をさな友達」『女学世界』第一八卷第五号 大正七年五月一日
- (6) 『生ひ立ちの記』 一六六頁
- (7) 『生ひ立ちの記』 一六四頁、『読完新聞』明治四五年一月二日
- (8) 『生ひ立ちの記』 一七一頁
- (9) 『生ひ立ちの記』 一六八〜一六九頁

- (10) 故河岡潮風「謎の女内藤千代子」『新公論』第二六卷第八号 大正元年八月
- (11) 『生ひ立ちの記』 一二八〜一三〇頁
- (12) 「新年のマダム」『女学世界』第一卷第一号 明治四四年一月一日・「新郎新婦の性格」『女学世界』第一卷第五号 明治四四年四月一日
- (13) 内藤千代子「青葉の蔭」『女学世界』第一卷第九号 明治四四年七月一日
- (14) 「誌友倶楽部」より 『女学世界』第一卷第一三号 明治四四年一月一日
- (15) みさぎ鳥「ス井トホーム」『女学世界』第一卷第一三号 明治四四年一月一日
- (16) 『女学世界』第一三卷第一二号 大正二年九月一日、なお横田順弥は『明治時代は謎だらけ』（平凡社 平成一四年）で、『ホネームーン』第一六版を所蔵していると述べている
- (17) 『女学世界』第二二卷第三号 明治四五年二月一日
- (18) 『女学世界』第一三卷第一号 大正二年一月一日
- (19) 『生ひ立ちの記』 一七一〜一七四頁
- (20) 『生ひ立ちの記』 一七四〜一七六頁
- (21) 『ホネームーン』 七二頁
- (22) 『ホネームーン』 八三頁
- (23) 『生ひ立ちの記』 一七七頁
- (24) 『生ひ立ちの記』 一九四頁
- (25) 『生ひ立ちの記』 一八八〜一九〇頁
- (26) 『生ひ立ちの記』 一一七〜一二一頁
- (27) 『ホネームーン』 二三九〜二四〇頁
- (28) 『ホネームーン』 一四六頁
- (29) 担当者「驚く手紙を読みて感じたるまゝを」『女学世界』第九卷第七号 明治四二年五月一日
- (30) △△女「驚く手紙を読みて」『女学世界』第九卷第九号 明治四二年七月一日
- (31) 「誌友倶楽部」より 『女学世界』第二二卷第四号 明治四五年三月一日
- (32) 『生ひ立ちの記』 一九一頁
- (33) 『生ひ立ちの記』 二〇一〜二〇二頁
- (34) 萩香「現代の人より」『女学世界』第一卷第一号 明治四四年九月一日
- (35) 『生ひ立ちの記』 二〇二〜二〇三頁
- (36) 『生ひ立ちの記』 三三四頁
- (37) 『生ひ立ちの記』 二〇二頁
- (38) 『エンゲージ』 三二〇頁
- (39) 『生ひ立ちの記』 二二二頁
- (40) 『エンゲージ』 三一九頁
- (41) 『エンゲージ』 三一九頁
- (42) 『生ひ立ちの記』 二二三〜二四三頁

- (43) 『生ひ立ちの記』 二四四～二四六頁  
 (44) 『生ひ立ちの記』 二四六頁  
 (45) 『生ひ立ちの記』 二五二頁  
 (46) 河岡英男『五々の春』博文館 明治四五年 二二二頁  
 (47) 『生ひ立ちの記』 二七三頁  
 (48) 『生ひ立ちの記』 二七二頁  
 (49) 『生ひ立ちの記』 二九三～二九四頁  
 (50) 『エンゲージ』 一三頁  
 (51) 『エンゲージ』 二二頁  
 (52) 『エンゲージ』 六〇頁  
 (53) 『エンゲージ』 七三頁  
 (54) 萩香『うれしい正月日記』『女学世界』第一〇巻第一号 明治四三年一月一日  
 (55) 『生ひ立ちの記』 一四六頁  
 (56) 『生ひ立ちの記』 三〇四～三三三頁  
 (57) 梶川孫一郎『稿本博文館五十年史』第七編(三康図書館所蔵)  
 (58) 『生ひ立ちの記』 三三三～三三四頁  
 (59) 『稿本博文館五十年史』第七編には、河岡が死去した際の河岡の母の様子を、「母ハ一人息子の死去に正気を失なひ、千代子を捕へて、英男を死せしめたのハ汝の所為なりとて、打鄭する惨劇を演じたる」と記されている

- (60) 『生ひ立ちの記』 三三九頁  
 (61) 『生ひ立ちの記』 三四三～三四四頁

(四二)

- (62) 『生ひ立ちの記』 三四四～三四五頁  
 (63) 河岡の『五々の春』の巻末に掲載された『ホネームーン』の広告には、「謎の女」の語が既に使われている  
 (64) 『大阪毎日新聞』大正元年一月一七日は、「鶴沼の浜在所からピヨツコリと出現して百万子女の血を湧かさせる奇態の腕ぶし」を備えていることを以て内藤を「謎の少女」とよんでいる  
 (65) 鶴丸梅太郎『旗の酒場』時代』郷土研究上方』第一〇一号 昭和四年五月一日  
 (66) 『生ひ立ちの記』 三五七～三六一頁  
 (67) 隣の人『自由奔放の女性』『女学世界』第二卷第一二号 大正元年九月一日

\*内藤千代子の生い立ちや『女学世界』における活躍については、拙著『良妻賢母の世界——近代日本女性史』(慶友社 二〇〇八年)を参照されたい